

沖縄の若者言葉

野原, 三義 / NOHARA, Mitsuyoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

265

(終了ページ / End Page)

282

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002563>

沖繩の若者言葉

野原 三義

筆者の担当する最近の講義科目などから沖繩の若者言葉について触れてみる。

しばらく前までは、演習などは、方言の音韻体系を立てることから始めたのであるが、最近の学生は、基礎的な単語でも、曖昧であったり、分からない場合が多い。内省のきかないものを行うよりは、思い、地元の二つの新聞に掲載された方言に係わりのあるものを調査することにしたのである。いろいろな問題が出てきたが、その中に、若者言葉に関することもあった。若者言葉という用語に関して、通りがいいと思ひ、新方言としたが、既に用いられている概念との違いがあった。新ウチナーヤマトウグチにしては如何かという助言もあった。ウチナーヤマトウグチの直訳は沖繩大和口であり、方言の色彩を帯びた共通語といつてよからう。「傘をカブル」（傘をさす）、「君ガモ分かるか」（君

のような者にも分かるか)のような例で、カブルは方言の動詞カンジュン(かぶる)の語幹カンに共通語の動詞語尾ルを下接させたもの、ガモは格助詞ガに係助詞モを続ける沖縄方言独特なもの、これを共通語の文の中に入れて用いているのである。ロロボーガ ロロニ コロンレ ロロ ララケ(泥棒が泥に転んで泥だらけ)のような音韻的なものも入れてよかろう。この種のをウチナーヤマトウグチというのであるが、方言そのものが分からなくなった若者には、もはや縁遠いものになってしまった。正座のことをヒザマズキといっていると新聞を賑わす時代になってきた。わずかに残った例である。

いま、ここに若者言葉というのは、若者の間でよく用いられるもので、その寿命は、それほど長くはない。伝統方言の影響もあるようである。これらのものは、大人の間にも広がるということは、まず無い。

一九九一年度の沖縄国際大学短期大学部国文科の琉球方言概論のレポートに若者言葉という題を課した。集まったレポートを九二年度の学部の演習受講生に整理してもらい、ゼミ報告書『新方言』第一号の後半部分に掲載した(以下、原資料)。これを契機として、以下のような卒論が出てきた。

- ① 一九九一年度、慶田和子「沖縄県における共通語教育の研究」―共通語受容の歴史―
- ② 一九九三年度、川満裕子「名護市における新方言の研究」
- ③ “ 岸本かおり「国頭村における新方言の研究」

④ 〃 崎原さおり「本部町における新方言の研究」

⑤ 一九九三年度研究生論文、照屋千秋「北谷町における新方言の研究」

⑥ 一九九四年度、上間麻野「宜野湾市における新方言の研究」

⑦ 〃 岸本利子「那覇市における新方言の研究」

上記①～⑦の内容を少し紹介しておく。①は九一年六月に知念高校の三年生から行った資料である。原資料から無作為に選び出したものをアンケートしたもの。結果を理解できるかという観点で5段階に区切っている。もっとも良く使われる五はグワシー、カンナジ、シカム、シニ、デージなど、ついで四のアフィー(アファ)、サンケー、バーヨー(バーテー)、チムイ、ムニーなど、三はウチナーヤマトウグチ、ヤシー、ジラー、ナジキテ、マーサイなど、二はイランパー、ハバ、ヤツケー、チャー(チェーン)、もっとも少ない一はバケ、チムグルサンなどである。

②③④は同一のアンケート用紙を用いて調査を行っている。方言を使用するか、どう思うか、あった方がいいか、話せていると思うかなど、10項目の意識を尋ねる質問と若者言葉を具体的に尋ねる問題からなっている。後者は、ある語を何というかと言う項目、例えば「とても」のところには、「しに、しにかん、じゃにか、でーじ、ばけ」を示して、○を付けさせる選択の問題、「うるさいときは何というか」「気まずいときに何というか」という質問の形式の問題などからなっている。

②は名護市の五中学一高校で調査したもの。「しに、しにかん、でーじ」など、よく用いるものが

あったり、「じゃかにか、ばけ、ばり」などのように、使われないものもある。中南部と名護市の違いを指摘している。

③は国頭村の七中学と同村出身の辺土名高校在学の生徒からも調査している。小規模校のため生徒数、10人前後という学校が多い。教育方針により若者言葉はみられないかと思われるが、「しに、でーじ」は名護市に似て用いられる。ただ「しにかん」よりは「しにか」を多く用いる。名護市で用いないものは、ここでも用いない。

④は本部町の三中学一高校の調査である。方言を使用しますかという質問に「はい」は高校男子は95パーセント、女子は31パーセントで性差が明瞭に出ている。三つの中学も学校によって若者言葉が違ふという報告がなされている。

⑤は北谷町の四小学校二中学一高校の調査である。意識調査のなかに「方言をどう思いますか」という質問に対し、「好きだ」という答えが、小30%、中38%、高67%という順に増えている、高学年になるにつれ、方言の評価が高くなっている。「方言が話せるか」という質問に対し、「すらすら」はほとんど無いが、「少し話せる」という回答は、小79%、中57%、高52%で、方言を認識するに従って、パーセンテージが低くなるのは当然であろう。若者言葉の項では、北谷小学校のベスト5は、ワジワジー、スバーヨー、ユクシ、クルス、シナースである。これらの語は、他の小学校もベスト10くらいには入っていて、大同小異である。北谷中学校の上位語は、デーシ(デーミ)、ヘンナー、ヒン

ジャー、ユクシ、シニ、バーヨーなどで、桑江中学校も似ている、しかし、桑江中のキムマイは北谷中のベスト10に入っていないので、町内中学でも異なるものがあるらしい。北谷高校は、アンチ（アシ）、ウミチカ、シニ、シニカ、シャニが上位語である。町内の出身中学と異なるのは、他市町村出身の者の影響が出ているのであろう。

⑥は宜野湾市の宜野湾高校二〇二人、普天間高校三四八人の計五五〇人からの調査。出身の小中学校にも目配りしている。「おしゃべりな人」を宜野湾高校はユニタクー42パーセント、パークー13%であるが、普天間高校はユニタクーが28%、パークーが24%である。各々の数値は出身小中高校で、パーセントが異なっている。宜野湾高校のうち浦添市の港川中出身者は、宜野湾市の中学出身者の言葉に比較して、やや、特徴的である。例えば、「すごい」をハバというのは、普天間中学出身者は33%、港川中学出身者は58%である。その他、ダバー、チェーン、ヒャー、チョーンなど文末の言葉の調査も行っている。

⑦は那覇市内の旧那覇・旧首里・旧真和志・旧小祿にある四中学で調査している。「とても」という語例を多い順に示すとシニ、デージ、メッタ、チョー、メツチャである。これらの中には日本全国区通用のものもあり、もはや、若者言葉ではなく、新方言といえそうである。文末ではバーヨー、バー、ヤッシー、ヤッサー、バーテーなどが表れる。また、単語のみではなく、文中用法も示している。

この種の若者言葉がいつごろから見られるようになったかを考えてみる。筆者は一九七八年一月一

三日に沖縄タイムスのコラム欄に「ある獲得」という下記のような短い文を書いた。

那覇市首里にある市営住宅に住んでいたころ、子供がミクンジャーといい出した。聾の意らしい。那覇口ではミンクジラーだし、『沖縄語辞典』（首里言葉）をのぞいてもミクジラー等とあるが、件の形は見当たらない。実はこの形沖縄北部方言にはあるのである。配偶者はかの地の方言が分かりはするものの、子に自分の言葉を押しつけることはしない。間違いなく友達づきあいの中から獲得したもののようだ。団地という所は、琉球各地からの寄り合いだから、言葉もるつぼのように適当に融合していくらしい。昔の久場川なら久場川という土地と何のかわりもない新久場川団地方言の成立になるのだろうか。とは言っても数少ない語が共通語の中にひっそり入りこむということになるのだろう。

最近は何ノダという意味のヤッサーをいろいろなものにくっつけるようになって「面白いヤッサー、痛いヤッサー」等とっている。バスの中で高校生までこういう使い方をするのを聞いたから、若者の間ではかなり一般的用法らしい。こんな奇妙きつな言葉遣いをするくらいなら、ちゃんとした共通語を使えばよいものと思う。もう少し例をあげてみよう。ままごと遊びのようなきに、さかんにウソガニというのであるが、ウソは嘘、ガは方言のフラグワアのグワアに当たる。二は全国どこにもある言葉ではある。要するにへ仮にくになる」ということである。クルサリンバーイと物騒なことを言うが、クルサリンローに当たるのだろう。ワジクサリッサーとかワジク

サレテはワジワジスッサーくらいにあたるか、アタランプーはアーティンプーのことだがもうよしてくれといたい。(以下略)

右記、下線部分の高校生の言葉の実態をかいまみることの出来る書物がある。一九八九年八月にでた『おきなわキーワードコラムブック』に「グワシー、ダカラヨ、ダバー、ハバ、バリ」などと単語例があり、「お母さん、あそこでたむろしているの、〇〇中学のぐわーしー(不良)だよ」「これなんだばー(これは何か?)」「見てみー。あの車、リンカーンやっさー。でーじはばー!(感嘆詞)」のように文例もあがっている。これらは、七八年の拙文の高校生の使っていた言葉の中身に似たものであったかもしれない。それにしても筆者の文からも分かるように、言葉を客観的にみる立場にある筆者でさえ、当時はまだ、この種若者言葉を認めていない。

一九八八年一〇月二七日と十一月一七日の沖縄タイムスタ刊のコラム今晚の話題に「かまさりんどお」「だばー」ショック」というのが載っていた。「アケミー、なにしているばー?」「これが、シャッターだばー」「ええ、しらーしらー」などと文例があつて、「沖縄の大人社会でもまだ耳障りの段階である」と書いているものの、全体の印象として、真実を述べていて、それほど非難めいたものは感じられない。次第に市民権を得てきたようである。

若者言葉にも伝統方言に近いものから共通語に近いものまで、さまざまな段階があると思われる。

ヤー フラー アンニー(お前馬鹿じゃないか)は前者であろう。ヤーは伝統方言の語頭のグロ

タルストップが落ちた形である。若者で *o:~* を正確に発音できるものは、ほとんどいない。そこで、ヤーに変化した形で受け継いでいったのである。フラーは伝統方言に同じ。アンニーは、伝統方言ではアラニというところである。いずれにせよ、この文型は従来の方言に近いものである。末尾上昇イントネーションで言われるヤールワ ナンダバーは（お前は何なのか）の意で、聞き手に対する詰問である。ヤーは上述の通りである。ワは共通語の係助詞「は」に同じ。ナンダバーは「何+ダバー」で、上昇のダバーは疑問・質問・詰問の意の終助詞である。サケ ノンデルヤシ（酒飲んでるよ）の文末のヤシは、断定の意の終助詞で、ここだけが若者言葉である。

以下に、原資料、及び①⑦などを参考にしながら、音韻・語彙などについて述べてみる。

若者言葉に関して、伝統方言と比べ、目立つところを擲まえて、バーター言葉などと言う場合がある。しかし、総体としてみる場合、実際は、ユンタクー、パークー、アバサー、ガチマヤー、ガチクー、ユクサー、アフアー、ドゥーチユムニー、ジュンニ、タシカなどなど、従来の方言と変わらないものも多く含んでいる。

宜野湾二高校調査で二十八・五%が用いるヘンナー（変だ）という形は、60代前後でも使うから、新方言（ウチナーヤマトウグチ）に入れても良さそうな形である。ヘンナーの出自は、本来の方言イフーナーのナーをヘン（変）にくっつけたものか、或いは、*n + a → na:*（例えば *ŋitiŋman + a → ŋitiŋimana:*）のようなルールが働いたかである。若者言葉には、このような新方言に類するものまであ

て、バライアティーに富んでいる。

若者言葉の構成は共通語＋方言、方言＋共通語などがある。

共通語＋方言の場合

ホラフツチャー、ホラフチャーなどは、共通語のホラフキに方言の性質所有者を表す接尾辞アーが付いたもので、さらに中南部方言の特徴である口蓋化も起こしている。ワラワサー（人を笑わす才にたけている者）は、共通語ワラワサに方言のアーの付いたものか、方言のワラースン（笑わす）から作られたものである。ただし、方言の普通の表現ならチョーギナー（滑稽な者）あたりであって、ワラワサーとは言わない。イライラー（面白くないときにいう語）は共通語イライラに方言のアーが付いたもの。

方言＋共通語の場合

ニリタ、クテータ、ダリタ（以上、疲れた）のニリ、クテー、ダリは、方言のニリーン（飽きる）、クテーン（こたえる）、ダリーン（疲れる）の語幹部分である。過去終止形のニリタン、クテータン、ダリタンに良く似ているが、方言の動詞語幹に共通語の過去の「タ」が付いて出来たものである。ワジッタ（怒った）も似たような構造である。

マチブル・マチャブル（混乱する、まとわりつく）、トゥルバル（黙りこくっている）、ニリル（飽きる）は、方言のマチブイン（混乱する）、トゥルバイン（黙っている）、ニリーン（飽きる）の語幹部マチブ、トゥルバ、ニリに共通語の動詞語尾「ル」が付いて出来たもの。チンチキル（つねる）も首里や今帰仁に関連の動詞があるので、同じ構造である。この種のもは、外来語を動詞化するさいのデモル（デモを行う）というのと似ている。ウシエテル（馬鹿にしている）は、方言の動詞ウシエイン（馬鹿にする）の語幹部ウシエーに「している」のつづまったテルの付いた形である。クルス、シナス（以上、殴る）は、方言のクルスン、シナスン（以上、殴る）の語幹に「殺す」「死なす」の語尾「ス」が付いたものであろう。シカバクー（すぐ驚く人）のシカはシカムンの語幹だが、バクーの出所はよく分からない。

ソーガサイ（すごい）は、方言ソーガッサン（恐ろしい）の語幹部ソーガッサの促音の落ちた形ソーガサに共通語の形容詞語尾「イ」が付いた形である。似たものに、アンマサイ（調子が悪い）、マーサイ（美味しい）、ウムサイ（面白い）、ウカサイ（可笑しい）などがある。

音韻

宜野湾二高校生は（すぐ驚く人）をシカバー（49%、以下%省略）、シカバクー（17）、シカマー（10）、シカポー（3）、シカー（2）という。例の少ないシカポー、シカーは伝統方言と同形。前三者も方

言シカムン（驚く）の語幹部を受けついでいる。ユムン（読む）↓ユマー（読む人）、カムン（食う）↓カマー（食う人）、クムン（汲む）↓クマー（汲む人）というところから、伝統方言でシカムン（驚く）↓シカマー（驚く人）となりそうであるが、この場合は、そうは言わず、シカボー、シカーというのが普通であって、シカマーとは言わない。ともかくも、この辺の類推から、若者言葉シカマーが出たのであろう。高校生の半分近くが用いるシカバーは、シカマーとシカボーの混交したところから出たのであろう。上述のように、シカバクラーのバクラーについては、よく分からない。

宜野湾の高校生（以下、宜野湾）は（気まずい）を半数以上がアフアー（55.6）という。これは伝統方言と同形である。三位にアフィー（8.3）という形があるが、i母音に変わっているのは、なんらかの理由での変化なのであろう。しかし、この現象は、宜野湾高校の中の港川中学（31）出身のそのまた港川小学校（38）出身というようにパーセンテージが高くなっていくので、その辺が出所かとも思われる。那覇四中学校の調査報告、総数四三〇人でも6%がアフィーとっていて、その中の小祿中に限ると16%と数値が高くなっている。数の上では、優勢ではないが、周辺部に根強くある形と言えようか。

宜野湾で（強く）をチュンジュク（41）、チュージク（17）、チュージュク（10）、チュージューク（3）という。もっとも少ないチュージュークは方言と同じ形である。これを元に、短くしたり、直音化したりで新しい形を作っている。もっとも多いチュンジュクは、ンを入れた形であり、那覇四中

学の方でも33%とよく使われている。チュンジュク、チュージク、チュージクという形は、北部の名護や本部でも用いられるので、全沖縄的な形といえそうである。

宜野湾で(独り言)をドゥーチームニー(42)、ドゥーチュイムニー(19)、ルーチュイムニー(13)という。後の二つは方言と同形である。チュイ↓チーと変化した形は、人気のある形である。類似したドゥーチームニーという形は、那覇四中学(32)でも、名護(34)でも、もっとも多く用いられる形で、(強く)のと同様、全沖縄的若者言葉と言えよう。

(禿げ)を名護(55)、本部(43、うち本部高校57)でパギーという。(嘘つき)を名護でパーチカー(27)、パーチキヤー(10)といい、本部はパーチカー(46)、パーチキヤー(3)である。(体にピツタリした(衣類))というのを名護(49)、本部(60)でピツチマイという。(おならをする人)を名護でプーピヤー(47)、ピープヤー(7)といい、本部は、名護ほどではないがプーピヤー(15)、ピープヤー(3)という。

(禿げ)のパギーは、方言と同形である。(嘘つき)の用例は、中南部でもパーフチャーという新方言が存したが、若者言葉には受け継がれていない。パーチカー、パーチキヤーはP音地域だから残ったものであろう。ピツチマイという形は、北部独特の形である。屁をプーというのは、音まね語であるが、語中のピ・プは、P音地域だからの形である。伝統方言において、沖縄北部方言は、ハ行古音P音の残存地域である。若者言葉は伝統方言にのっとる場合が多いが、P音の特徴も取り込んでいて、

北部らしさを表しているのは注目に値する。

語彙

宜野湾で(すごい)をハバ(44)、バリ(3)という。ハバの内訳は宜野湾高校(44)、普天間高校(25)である。宜野湾高校を細かく見ると、港川中学出身者は58であるが、そのうち港川小学校出身者は68である。那覇四中学では、ハバ(41)、バリ(3)、別形だがアライ(36)も良く用いられる。ハバとかバリという形は、中南部に多い形のようにあるが、北谷高校の例は1人だから、無いと考えるてよい。なおこの形は沖縄北部にはないようである。

宜野湾で(本当に)をマジ(38.5)、シンケン(23)、ジュンニ(16.5)、タシカ(14)、という。那覇四中学の場合は、マジ(56.2)、シンケン(10)である。名護はマジ(36)、シンケン(26)である。上の数字のように、マジ、シンケン是全沖縄的な若者言葉といえる。マジ、シンケンは、全国的にある形だから、それを受け入れたことになる。ただし、この形は、大人は使わないから、やはり若者言葉とすべきであろう。ジュンニ、タシカという形は、方言と同じ形である。

宜野湾で(とても)をデージ(28)、シニ(25)、チョー(17)、シャニ(5.5)、シニカ(5)、アンシ、シャニカ(以上2)、メツチャ、アンチ、シャカニカ、サッコ(以上1)。北谷高校の場合(町出身21人)は、デージ・デーミ(15人)、シニ(13人)、ウミチカ(12人)、シニカ(11人)、シャニカ(10

人)、シャニ(九人)、アンチ・アンシ(9人)、シャカニカ(7人)。那覇四中学の場合は、シニ(323人)、デージ(321人)、メッタ(209人)、チョー(198人)、メツチャ(174人)、名護はシニカン(26.8)‘チョー(24.2)‘デージ(15.3)‘シニカ(14.7)‘サッカー(11.9)、本部はシニカン(27.9)‘シニ(23.2)‘デージ(20.9)‘チョー(16.9)である。以上をみると、デージ、シニ、チョーがほぼ共通である。宜野湾と北谷は近隣のせい、シャニ、シニカ、シャニカ、シャカニカ、アンシ、アンチなどにも共通が見られる。北谷のウミチカは、他ではみられない。那覇四中学で三番め五番めに多く用いられるメッタ、メツチャは、宜野湾に僅かに見られるが、他に表れない。那覇が本場ということらしい。名護や本部のシニカンは、出自においてシニと関連があると思われるが、他ではみられない。北部独特の形である。名護のサッカーも他では言わないようである。

那覇四中学で(怒ったときに言う言葉)はムカツク(64)、ワジワジ(17)、ワジッタ(11.5)である。名護では、ワジワジ(40)、イライラー(38)、ワジクサミースル(15)である。本部では、ワジワジ(32)、イライラー(32)、ワジクサミースル(22)である。北谷の中学の若者言葉一覧は、デージ(デーミ)41人から始まっているが、ワジワジは29人で10番目である(高校の場合は17人で2番目に入っている)。よく用いられるワジワジは方言と同形である。ワジクサミースルは北部に特有な形。那覇でよく使われるムカツクは、共通語からでた言葉。イライラーは、上述のように、共通語イライラに方言の接尾辞アーの付いたもの。イライラーは、中部でも耳にするが、大人は、ムカ

ツクを含め使わない。

本部で（目を細めて見る）をスーミー（75）、本部高校の場合は90.5）、ミーススー（2）という。これは、本来の（覗き見）を表したスーミから出た語で、さらに意味の変化を起こしている。名護の方でも、スーミー（80）、ミーススー（九）と用いられる。本部で（盗む）をカマス（51）、パカス（33）といい、名護でカマス（60）、パカス（38）。本部で（早く来い）をクーバ（39）、キチマー（21）といい、名護でキチマー（47）、クーバ（8）。本部で（つねる）をチンキル（62）、チンチキル（3）といい、名護でチンキル（71）、チンチキル（9）という。名護と本部は、伝統方言においても沖縄北部方言に分類される。その名残は、若者言葉にも、しっかりと受け継がれて、近い関係にあるようである。

（思わず出てしまう言葉）という質問で、宜野湾二高校の調査結果は、アイツ（16）、ダカラヨ（12.5）、ハッシュェ（9.5）、ベー（8）、アゲーツ（7）、アイヤー（6）という順に並んでいる。ほぼ、方言と同形であるなかに、新方言にちかいダカラヨが目立っている。那覇四中学の結果も宜野湾に似ているが、四中学すべにおいて二番目に位しているイミヨー（相手の言うことが良く分からないときに発する不快感を表す言葉）は、那覇の特徴のようである。

文末の語句

若者が使う言葉の文末の語句バーターなどが目立つからバーター言葉などと言われるが、その文末の語句に関して宜野湾二高校の調査がある。多い順にあげる。()内はその一例。①アンニ(17)。フラアンニ「馬鹿じゃないか」、②ヤッサー(12.5)。ツカレタヤッサー「疲れたなあ」、③ダバーヨー(11。天才ダバーヨー「天才だよ」、④バーヨー(11。ムカツクバーヨー「むかつくのだ。不快感を表す言葉」、⑤バーター(11。痛いバーター「痛いんだ」、⑥ダバーター(10。ヘンナダバーター「変なのだ」、⑦ダバー(9.5。ヤー ナンダバー「お前なんなのだ」、⑧チェーン(5。見チェーン「見てある」、⑨ヒャー(2。アノヒャー「あいつめ」という具合である。順に若干の説明を加える。①アンニは、方言アラニのラガンに変わったもの。方言フラーアラニ(馬鹿ではないか)に似ている。②ヤッサーは、方言と同形。方言はジュシエー ネーン タルー ヤッサー(間違いなく太郎だね)と名詞に付き、断定の「だ」の意に近い。これは、共通語で「疲れた」+「だ」と言えないように、活用語などには付かないものであったが、若者言葉では、東北方言のように用いられる。⑧チェーンは、方言チェーンに同形。方言はシーチェーン(見てある)というが、ミチェーンとは言わない。連用形接続は新しい用法。⑨ヒャーは方言と同形。ただし、アヌヒャー(あいつめ)とは言いが、アノヒャーとは言わない。共通語。方言半々の用法に変化している。③④⑦も方言の接尾辞などに関係ある形である。方言の例えばイチュン(行く)の連体形イチュルにバー、バーター、バーヨーなどを付けて、①イチュルバー、②イチュルバーター、③イチュルバーヨーといえる。意味は大体似

ていて(行くわけだ、行くわけさ) くらいの意味である。バー、バーター、バーヨーは(行く)という行為の肯定判断の後に付いていると考えられよう。若者言葉の③④はバーヨー、⑤⑥はバーター、⑦はバーを含んでいる。③⑥⑦は肯定判断のダが前接している。④⑤は動詞、形容詞の連体形に付いていて、方言の用法に似ている。ともかく、イチュルの部分は「天才、ムカツク、痛い、ヘンナ、何」となっていて、共通語+方言の組合せになっているが、基本的構成は変わっていない。

那覇四中学校の例は、バーヨー(240人)、バー(221人)、ヤッシー(173人)、ヤッサー(173人)、バーター(169人)、アンニー(124人)、チェーン(40人)である。三番めに多いヤッシーはヤッサーに意味・用法とも似ている。方言を基にした新しい形である。チェーンはここでも少ない。それ以外は大体似ている。ここでも一例ずつ用法を示す。「デーシ楽シカッタバーヨー(とても楽しかったよ)」「ドコテ集マルバー(のか)」「アイツ頭イイヤッシー(なあ)」「オマエ天才ヤッサー(だなあ)」「食器洗イシタバーター(んだよ)」「絶対シツタカーアンニー(きつと知ったかぶりだ)」「自転車ノチェーンガハズレチェーン(ている)」。文末の語句は、名護、本部といった沖縄北部方言域も、中南部に大同小異である。

若者言葉というと、従来の伝統方言と非常に異なるように思われがちだが、多くの部分は、方言を基にして出来ている。ある場合は同様であったり、ある場合は用法が変化している。全国的に通用しそうなチョー、マジ、メツチャ、シンケン等というようなものは、多くはない。という程度のことは

言えそつである。